

福 井 県 医 師 会

だより

第710号 令和2年(2020)8月

第99回 福井県医学会総会 特集



左：池端福井県医師会長 右：松田大野市医師会長

醫 縫 録

新型コロナウイルス感染症により 築かれた感染対策の絆

～福井県内 COVID-19の第一波を乗り越えて～

福井大学医学部附属病院 医療環境制御センター・
感染制御部教授 岩 崎 博 道



■県内第一波を乗り越えて

本稿を書いているのは2020年6月も残り少なくなってきたところです。今、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第一波を乗り越え、一息つくことができます。福井県では3月18日の県内第1例の発生以降、未曾有のパンデミックの波を経験しました。6月21日に開催された福井県医学会総会では、厚生労働政務官の自見英子参議院議員から、福井県は関係機関の連携でCOVID-19流行の早期収束に結び付けたことが紹介され、「福井モデル」としてぜひ国内外に発信してほしいと称賛を頂きました。県内では合計122名の患者発生が報告されましたが、凡そ1か月で収束に導くことができました。この背景には、県内各病院と福井県医師会、そして県行政の連携がありました。早期発見のための行政による積極的な濃厚接触者へのPCR検査の実施、福井県医師会の先生方によるドライブスルー方式（図1）PCR検査センターの開設・運用、早期治療のための入院コーディネートセンターによる患者入院先の振り分け等、医療界の絆が大きな力を発揮したのだと思います。

平穏な時期が続くことを祈る次第ですが、世界的にはCOVID-19は未だ終息したわけではないため、第二波は必ずやってくるものと考えるべきで



（図1）大学ヘリポート付近で行う
ドライブスルー方式 PCR 検体採取風景

す。ニュースに目を移すと、WHOのコメントが流れ、米国やブラジルをはじめとする南米では、感染者数増加の制御が全くみられず、過去最多の1日当たりの新規患者数が連日更新されていることを伝えています。COVID-19を克服するためには、世界各国の連携により感染者数の抑制が必要と思いますが、そのためにはワクチンの開発が必須です。地球上のどこかに患者多発地が存在する限り、人の動きが止まらなければ、いつどこで新たなクラスターの発生が起きてもおかしくはない状況が続きます。

■飛沫感染と接触感染

COVID-19は密かに周囲にクラスターを作り、地域に流行していきます。とにかく「油断しない」ことが大事です。COVID-19は感染症の成り立ちを理解すると対策が見えてきます。インフルエンザ同様、呼吸器感染症であり感染経路の根源は“飛沫感染”です。感染者は、飛沫を周囲に飛ばさないためのマスク着用が必須です。予防のためにマスクが必要なのか、必要ではないのかの議論も盛んになりましたが、流行期にはすべての人が感染者であると想定してマスクをすること（ユニバーサルマスクング）が定着していきました。飛沫は短時間で落下してしましますが、いろいろなものに付着したウイルスは一定期間環境に存在します。プラスチックやステンレスだと3日程度ウイルス活性を保つようです。このウイルスに接触した手が、目・鼻・口に触れ粘膜を介して感染する“接触感染”がもう一つの重要な感染経路です。2020年2月の横浜でのダイヤモンド・プリンセス号対応の報告を見ると、船内で感染した医療従事者の感染経路はほとんどが接触感染だったことが明らかになっています。このことより、手指衛生の重要性が改めてわかります。

■第二波への備え

第二波を迎えるにあたっては初動が大事です。

まず、初発症例が発見されれば、その濃厚接触者を早急に割り出し、クラスター形成があるのかどうかをすぐに確認しなければなりません。そのためには直ちにPCR検査を実施することです。これが第二波を大きなものにしないためのポイントだと思います。PCR検査は今後、材料として唾液も使えるようになるでしょう。短時間で結果の出る抗原検査も普及していくと思います。次に、感染対策のため必要な物品の備えを進めることも重要です。標準予防策のための个人防护具（PPE: personal protective equipment）を整えておくことです。フルPPEといわれる、マスク、ゴーグル（フェースシールド）、長袖ガウン、手袋、キャップがあれば十分です。これらは飛沫感染対策を兼ねます。宇宙服のような全身防護服は必須ではありません。そして、接触感染対策として、手指衛生のためのアルコールや石鹸を準備しておくことです。アルコール消毒または石鹸・流水による30秒間の手洗いが自分を守る最後の砦です。

■福井で築かれた感染制御の絆

本稿でぜひお伝えしたいことがあります。福井県では数年前より、院内感染防止のための専門家集団で作られる「福井感染制御ネットワーク（Fukui Infection Control Network : FICNet）」（図2）という組織が活動を続けています。行政的な感染症対策の枠組みとして、第1種および第2種の感染症指定医療機関が整備されていますが、それに加え院内感染対策の推進のために、感染防止対策加算病院が認定されています。2020年6月現在、県内には加算（1）認定が12病院、加算（2）認定が16病院あります。この認定の施設基準の要件として、感染症を担当する医師・看護師・薬剤師・臨床検査技師の4職種の連携が求められます。2015年に第1回FICNet会議が開かれ、2020

年6月19日に第10回目の開催を終えました。コロナ禍の中、この会議を開催すべきかどうか、悩んだ時期もありましたが、この時こそ感染症担当の職員の意見交換は必要であるとの意見が強く、開催を決定しました。この時期には、まだ地方レベルでも学会や研究会の開催も実現していない状況でしたので、100人を超える集会をどうしようか悩みましたが、次第に普及してきたオンライン（Zoom）会議の形式をとりました。各施設に1台パソコンを用意して頂き、4職種のメンバーが同席して参加いただきました。一部、回線不良で会話が途絶えた場面もありましたが、十分意見交換ができたことに安堵しました。今回は、もちろんCOVID-19に対しての意見交換が熱心になされました。感染対策はとくに嚴重にやりすぎると疲弊します。しかし、まったく何もしないとCOVID-19は容易に侵入していきます。適切な正しい感染対策を、メリハリを付けて行うことが肝要であることの認識を共有しました。福井県内のCOVID-19対策をつなぐ絆としても、このFICNetがさらにいっそう皆様とともに育って欲しいと思います。

■新しい生活様式

「新しい生活様式」の実践がいつしか、国民的なキャッチフレーズになってきました。帰宅後や食事前の手洗い、マスクの着用、そしてソーシャル・ディスタンスの遵守、3密の回避、部屋の換気等、これらはもうそろそろ身についてきました。

顔に触らない事も大きな感染対策です。自分の顔には、できる限り触らないように心がけてはいるのですが、どのくらいできているのかは明らかではありませんでした。ある講演会のときに同席した感染管理看護師（ICN）が私の行動を観察してくれていて、講演後に、「先生、1時間の講演の間に7回顔に触っていましたよ」と指摘を受けました。全く、無意識の行動です。その講演の中で「顔には触らないように」と強調している本人が、顔を触りながら話をしていたのでした。過去の報告から、人は無意識に1日に50～400回顔に触るとの報告もあります。なかなか難しいことではありますが、「むやみに顔には触らない」を、私自身の次の大きなテーマとしていきたいと思っています。



（図2）FICNetを紹介する福井県のホームページ